

東大斗争 獄中書簡集

捕虜の身の我々が、彼らを論理的に
圧倒することを試みて、一体全体成功
した試しがあるだろうか。
ブルジョア法秩序にいささかの幻想も
抱いてはならない。
にもかかわらずこの消耗な斗いは
おろそかにされてはならない。

目

次

一、七月五日	中野より	工藤民男(山形大)	一
二、七月七日	小菅より	蓮海入道(広島大)	三
三、六月二十八日	中野より	グバ崎通広(J斗委)	五
四、七月九日	府中より	多佳井輝(仮名)	九
五、七月五日	東拘より	長井美智夫(仮名)	十一
六、六月三十日	東拘より	上条邦彦(横国大)	十四

七月五日 中野刑務所より

工藤 民男（山形大）

「反乱は自己表現の熱に浮かされている」

前回の便りを「次からは論理的な手紙を」という約束でしめくつたのですが、どうも「論理的」整合を求めるに、こぼれ落ちる部分が多く、その部分こそ「自己表現の熱に浮かされている」ようです。

そこで、どこまで表現し得るか、ひとつその部分を拾い上げてみようという気持になつたわけです。いわば、我が貧しき

「大学ゲリラの唄」といつたところ。

まずはそのへ序へから…：

*

ぼくらは砦の上に一瞬

へ未来へを創り出したのだ

闇に突き刺さる一閃の光を

それがぼくらの

罪状のすべてだつた

▲ 子らへ

▲砦からのベースディカード
ゆうべからずつと燃え続けてる眼に
冬の冷たい湿り気を吹き寄せてくる
美しい夜明けだよ

二十歳になりたてのきみが目覚めた夜明け
(きらめきながらぼくらを包む轍)

愛しているつて きつと
こんな気持なんだね

ぼくはさつきから生まれてはじめて
ゆたかにひろがつていく心を
ジツとかみしめているんだよ
(無機質なテノールは愛を知らない)

今年のきみへのプレゼントは
とびつきり上等なんだ それは

たたかいとる時間と空間
(とび込んできた荒っぽい祝砲)

さあ、ぼくの存在を吸つたつぶては
掌の中で熱っぽく投擲を待つてゐる
約束しよう

ぼくたちの夜明けを決して敵に渡しはしないと

今朝もまた壁を越えてくる校内放送
アナウンサーの女の子の声はどこでも
おそらく分別くさいアルトに決まつてゐる。
しかしどうしても隠すことのできない

一本調子の幼さが今朝もまた

本当の先生になつて帰つてくると

誓つて別れた子らを思い出させる

ぼくはその誓いを破らねばならなかつた

一 (中学卒業後上京電気工など幾つかの職業を経て二年前より
芝浦に住みつく港湾労働者)
検事のヤロウ港湾人夫と言いやがあつたオレ頭にきたから港湾
労働者だつて言つてやつたんだところで人夫つてどういう意味
だいバカにした言い方なんだろ

一 (脅迫刀剣不法所持の疑いで逮捕)

オレ包丁持つてヤツの部屋に飛び込んだヤツぐつり寝てるん
だ顔シツと見てたらかわいそうになつてヤツを起こして包丁を
渡したんだ それだけなんだよでも罪つてやつはいつぱいある
んだなあ魚とりに行つてきた連中イワシ一匹持つて帰つたつて
窃盗罪だてめえがとつたものでめえのものにならないなんてお
かしよなあ

一 あんたらの考えはキレイだんたらのやり方もキレイだオレ
むずかしいことわからんけどそう思うな だけどオレ学生じや
ないわらなやれないと
一 ここにいりや安全だ上から鋼材落ちてこねえもんな
(カツ兄イは黙否権のあることを知らなかつたなあこの調書を
とつている間隣の死体安置所から材木の下に夫を殺された女の
泣き叫ぶ声が聞こえていたことを付記しておく)

△ カツ兄イの供述調書
一 (カツ兄イ二十七才本籍地 長野県N市)
酒を飲んでの帰り町はずれでシヨンベンをするんだ遠くでチ
カチカするのはありやあ農家のあかりだ田んぼの上一面こう

ウツスラと青味がかつた雪だそしてまつ暗な空に山がでつか
くてなあオレはブルツと身体をふるつて最後の一滴をはじき
とばすんだそりやあ気持のいいもんだあ

△ 近況報告

七・三第一回公判。「ゼンスト」と「ハンスト」で拒否。さす
が最後の一枚にはいささかチユーチョした。だが、ぼくらにやい
かなる「イチヂクの葉」もいらない。かくてフラツシュ一閃!

横尾忠則クンとはほど遠いカツクワルイ男性NUDた写真が法廷に運ばれ、我が出廷拒否は貫徹したのであります。

（このへん映倫カツトかな）

ともかく「裁判官」であるといふことだけで裁く権利を、「検察官」であるといふことだけで告発する権利を、彼らに与えはしない。ましてや「被告人」などといふ名を甘受して裁かれることなどキツバツと拒否する。

△蛇足▽

第八号所収、父への詩第二連「白い杖を拒みつけようのなかつた怨命」は「白い杖を拒みつけさせた怨念」と訂正を。

ぼくの側のミスと思ひますが意味が正反対でするので敢えて。

「プレイボーイ」（7/8号）のぼくの詩の引用、あまりにひどいブツタ切り。一部を全体から切り離すと白が黒になつてしまふという好例。今離公判の論理。このような無責任な転載を許さぬよう刊行委員会に脚一考を。

七月七日 小管刑務所より

— 「僕の血は眞赤だ！」

蓮 海 入 道

四月中旬頃だつたろうか。
獄中から同郷のY君へ手紙を出した。
彼は（准）民青である。

そういうえば、機動隊（警察）にも鹿児島（薩摩）人が大勢いるとか。

「歴史をふり返れ／君の転向声明を待つ」

しかし返事は来なかつた、彼はちよつとでも読んでくれただろうか。それとも全然読まずにポイと捨ててしまつたのだろうか。

大学の構内ですれちがうとき、彼はいつもステキな微笑みを投げかけてくれる。

彼は（準）代々木である。そして僕は反代々木だ。

— 軍争は闘争の法則をもつ。

彼を殴らねばならぬ日がいつか来るだスう。

九大に米軍機が墜ちた。

抗議闘争に参加するため、僕も広島の地を発つた。

構内デモをしているとき、高校の同級生に遭遇つた。彼はノンボリだとか

“Tは革マル、Sは民青になつてゐるぜ” 電撃が脳裏をかすめる。そうか？ Tは革マルで、Sは民青か。そして僕が中核派か。

僕は高校の同窓会には行くまいと思つた。革マルになつたTや、民青になつたSの顔を見るのが厭だからである。

— 闘争は闘争の法則をもつ。

彼らを殴らねばならぬ日がいつか来るだろう。

僕が石を投げつけたあの機動隊員は同郷の青年だつたかも

しれないな。

僕を警棒で殴つたあの機動隊員も同郷の青年だつたかもし
れないな。

——闘争は闘争の法則をもつ。

保証で出たら、また彼らを殴らねばならないだろう。

6. 僕の血は真赤だ！

ア・ノ・ト・キ飛び散つた血の色がそつたもん。
しかし血には真赤な血もあればドス黒い血もある。紫色もあ
るだろ？

佐藤英作の血は何色だらうか。

* * *

所感 2.

数日前、僕の前の房と左隣の房の学友が突然いなくなつた。

僕はちよつびり寂しかつた。でも負けるものか——負けた
ら“背中の銀杏が泣い”チヤウもんな。僕はそう決意しな
がら、内なるバリケードを再校築するのだ。

寺田屋の変があつたつけ。

“○○どん、御免／お国のためじや死んでくれ”

彼はそうきつて、組みついた二人の同僚を背中からクシ刺
しにしたのだった。

彼らも皆、同じ鹿児島（薩摩）人だつたつけ。

——百年前も闘争は闘争の法則をもつていた。

5.

新しい社会の胎動があるとき

そこには人間の血が流れる。

支配—被支配の壮絶な闘いがあるとき、

そこには人間の血が流れる。

△暴力は新社会を貯んでいるあらゆる旧社会の助産婦であ
る▽

陣痛の苦しみを経て、新しい社会が創造される。

分離公判粉碎、統一公判貫徹！
地裁権力の暴虐を許すな！

最後までともに闘おう！

6.

六月二九日 中野プリズンにて

ゲバ崎通広

前略 さて、私のところにも赤紙ならぬ例の召喚状が届き、言
うまでもなく出廷拒否を貫くつもりです。

先般出廷拒否（三太郎君の声がした）の際、騒々しいので、抗
議したのだけれど歯どたえがないというより文字通りナンセン
スの一語に尽きた。多くの獄内の諸君は感じていると思うが、
ここでは物理的意味においてファイフティーファイブティイでないば
かりか論理的にもそうなのだからイヤになるよ。△金筋▽だと
か△星▽の数が多いほど相手にハンディキャップを負わせるこ
とのできるこのような真空地帯において△星▽なしで、それも
捕虜の身の我々が、彼らを論理的に圧倒することを試みて一体
全体成功した試しがあるだろうか。ブルジョア法秩序にいささ
かの幻想も抱いてはならない。にもかかわらずこの消耗な斗い
はおろそかにされではならない。

ところで差入れの雑誌「進撃」（最近初めて12号が入つた）等
々の中に看過し得ない問題がかなり含まれており、いちいち指
摘反論したいのだけれどままならず。ここに二、三述べておき
たい。

まず第一、六月十五日号の朝日ジャーナルの最首論文の中にみ
られる水上26号君に対する無理解ぶりないしは一面的理解につ
いて

水上26号の「彼ら庶民にソツとするような冷淡な拒否を与えること、彼らに対するおしゃべりという「迎合」は明白なる誤り……」
小生は……従前の社会性をようやく突破することによつてプロレタリア統一戦線の一翼に連なつた。」を引用している。確かに水上26号の文章には彼一流の修辞が散らばつてゐるけれども、全体的に真摯に読むならば、決して曲解していくことはならないだろ。彼は他ならぬ「知性に命じられて進撃している」人達に対する警句として発したと私は理解している。

ついでながら書つておくと、私はノンセクトと称する部分が雑誌等々の座談会の中で、あまり本質的（ラジカル）でないことを喋り散らしているのを読むとき、ほとんど沈うつた気分に支配された。ホゾを喰む想いなしにそれら愚作に接することはなかつた。敢えて私は愚作と断言してはばかりない。なぜつて？ 彼らの發する言葉に私自身の痛みを感じることも、私自身の△叫び声▽を聞くこともほとんどなかつたのだから、その意味において、少くとも私にとつては愚作以外の何物でもないのだ。それらを一言で表現すれば「知性が我々に進撃を命じる」の論理。

民青の人達はそれにならつて、「大学の自治」なる理念が我々に進撃を命じると答えるだろう。

さて最初に戻つて、水上26号は△庶民▽（？）たちは知性だの理念だのが彼らを論理的に圧倒することによつて、彼らの生活倫理を吹き飛ばすことはなく、従つて進撃することはなく、つまり、彼らが教育問題に対する幾つかの知識を得ることよりも、むしろ彼らも、自らの生活過程（存在構造）の次元において△むりにも

「踊りをおどらせる／自らの存在の根源に立ちかえらせる」という方策の問題として提起しているのだ。

彼はいつぱい引用している。「理論的感性的な人間活動そのものの総体が対象的活動として捉えられなければならない。」「諸・感覚」は人間的実践において直接理論家となつていてる。

「これら沈黙して石のようになつた人間関係に無理にも踊りをおどらせねばならない。これによつて国民のやみがたい欲求が充たされる。しかも国民の欲求は、それ自身、それが満足されるための究極の根柢である。」（M A R X）等々と述べているのだから、これらを曲解して拒否しなければならないという言葉は水上26号ならずとも、聞き捨てならないだろう。最首兄は同じ論文の中で吉本隆明の「頬発への誘い」「…さしあつて全てを疑え」というスローガンでもつてレーニンの組織論を現実の波濤の中に沈没させるのが理想だと思う。わたしがただ否定し、破壊的言辞をふりまき、現在の政治思想状況を混沌とかきませてゐると思うかもしれない。しかしかたしにはそれが唯一の現在の建設だという確信がある。」を引用しているくらいだから、なぜ水上26号の問題意識を捉えかねているのか不思議な気がする。これらの一連の吉本の論文の中の鋭い問題意識は、天上界にハプロレタリアの王国Vをうたて、大衆をパクべく地上へ降りんとする「前衛」主義者に対する根底的批判として出されたはずである。ともあれ最首兄が再度、水上26号の文書を、本文、引用文とも緻密に読まれんことを要望する。

第二に、進撃12号の文スト実の問題提起に答えただけれども

ど、別の機会にする。

それから、書簡集九号の中の六月五日付の中の外人部隊と東大全共斗と間の質的差異」として「革命の視点から大学を視ているのと、大学斗争から革命を展望している」という指摘は当つてない

いと思う。

これはむしろ党派間の問題だ。詳細を論じてもカツトされるから書かないが、今后運動の次元で決着がついてくるだろう。九号の五月十六日付の中で誰かが引用している。「同時に社会運動でないような政治運動は断じてない」（M A R X「哲学の貧困」にカギがある）いつかの書簡集に「党派とはイデオロギー的に信じてしまえばどうにでもなる集団」と書いた「ノンセクト」の人があたが、この党派に関する発想はあまりに自己に対して不誠実でありはしないか。私は東Cの時代少くとも一年間は、あらゆる党派のビラを読みあさり（これは余談、私は寮生だから今回ガサ入れを喰わなかつたが、ガサ入れがあつたらデカは私の部屋の押し入れの中に一回程の高さに積まれた当時の各党派のアシビラを一枚一枚点検しただスう）現在は明解に党派の必然性を信じてゐる。それは第一に彼らの発する叫び声の中に最も多く私の発するべき叫びを見出したからであり、彼らの斗争の中に幽かながらも展望を見出したからなのだ。充分なことはここでは語り切れない。

獄中書簡発刊委員会殿、とりあえず火夜里子君にあてて例えれば君は突然父親に死なれた生徒が担任の教師に「○○さん氣を落とさずに、しつかり勉強していく学校に入るんだよ。」と励まされて勉強に精を出す気など、これっぽつもないのに「はい。とても

悲しいのですけれど悲しみをのりこえて頑張ります。」と言わなければならぬ羽目に陥つてしまつた時、この生徒の自己嫌悪について理解しているださうか。

あるいは又、社会に共同体の幻想を抱き、繋りを求めるがる年頃、君々新聞に投稿したことがありはしないか。政治的高校生は何度、投稿しても掲載されないのである時試しに「良識派」振つて優等生の文章を書いた。すると、たちまち掲載されたのだが少しも嬉しくなく、むしろ自己嫌悪にさいなまれて、やはり奴らは俺達のメディアではないのだと思はれ、不快な疲れのみ残つた。こんな経験が君にはありはしなかつただらうか。

どうも腕曲暗示的な文章を書くのは苦手で、私の意図は伝わらなかつたともしれない、それでは少し直截に切り込もう。君は言う。「本当のアージを我々は求めていい。人をバクることのできる言葉、政治的網領でも経済分析でもなく論理的ですらない何か。「全てはわかる。しかし僕は斗わない」というその人を動かす言葉を」と。この言葉には陥弄がある。

第一には君の言う現状「分析」とは単に帝国主義の危機の発現形態をあれこれと客観主義的に描写することを捉えていること。私は血と肉をもつて現実に生きている人間にどうかかわつているのかという視点を欠落した現状「分析」が横行していることを言つてゐるのだ。私はいつかの書簡集の中に述べられていた「「鉄砲が政権を創り出す。」「未来は我々青年のものだ」を半ば教条的に半ば経験主義的に信じて斗い抜こう。」といふ現

に斗つてゐる人達のそれなりのパトスを信じるにやぶさかではない。けれどもそれは組織者（オルガナイガー）の態度ではない。我々にとつては現状分析の中にこそ我々がなぜ斗つてき。なぜ斗い抜こうとしているのか。」の回答が含まれてゐるものなのだ。

にもかかわらずそれは現状分析をわい少化する発刊委にとつては「ニセ物のアジ」として前半省略とかカットの対象になつてゐる。かくて我々が文章を綴らうとすれば先述の自己嫌悪に似た想いを味わなければならない。

火省里子君、私も又、リロイ・ショーンズとともに「弾丸を発射することのできるような詩」を望んでゐる。あらゆる人をバクることのできるアジ？

これらに対する回答は水上26号君も一定程度出しているし、あまり多くのことを語らないことにしよう。我々にできるのはたしかだか人達の弛緩」切つてゐる生の弦に緊張をもたらすこととか、彼らの存在の根に降下することを喚起するに過ぎないということ。さもなければ君の言う「本当のアジ」とはプログラマティクに「報い」（社会的効果）を求めてやたら悲鳴をあげることに終始するかもしれない。最近よく見かける「〇〇分ごとに笑えます。」「最高回数は〇〇〇回（十九才の〇レ）などといふ喜劇の新聞広告。感情の押し壳り、あれ、醜悪だねエ。

ついで、言葉がすさんてしまい、辛辣で過激な論調になつてしまつたけれど「発刊委員会が今后も健斗されんことを」という言葉に他意はない。そちらには、そちらの編集方針があり、それに沿つて主体的にやつてゐるとすれば文句を付けられる筋合はない

いのだからね。私はカットされた先の便の最後に以下のようないふを述べた。私が前進しているの（例えは権美智子）「死者が来たりて我が退路を絶つた」からでもなく、まして、知性に命じられてではない。

又、自ら退路を絶ちながら、自爆の道を進むしている、悲壮な覺悟の兵士でもない。私にそんな自殺指向性はない。むしろ言うならば「自己破滅」という形象を通じてしか自己解放するとのないそんな「自滅」の道を私は疾走しているのだ。フルスロットルで、欲求という名の推進力がエンジン全開にしている。

と・知性だの、天界の観念的前衛意識が人を歩かせることもある。一定限度に正しいだろう。けれども我々のこの気の遠くなるような長い道程を歩かせ続けるだけの推進力はない。そのように現象したとてそれは仮象でしかない。私は唯々知性過信が悲劇的終局を迎えないことを祈るのみ知性云々にこだわり過ぎたかもしれない感じつつ筆をおく。

最後に獄内のJのI君「生き急ぐ」読んだよ。この間、佐々木君がきて君が東拘で健在なのを聞いた。それから小首のもう一人のI君、我が中野のW君（私の房の上あたりにいるらしい）M君へ。川端某の向こうを張つて私は今「穢い日本の私」と題する、児童準備集合罪等受罰記念講演を中野ブリッズ内独居にて開催している。同時収録中、無論、聴衆は零だ。（房内筆記）に関しては監獄法施行規則の中にもあるように、駄い出れば条件つきで許可されるはず。私の方は法律学、経済学その他勉学

上ののみに使用するという条件付きで、もうだいぶ前からボールペンとノートが使用許可されている。刑訴は裁判もあるし、一通りやつたけど、アホらしくて。）その収録中の講演だけど、無力で活動の対象をもたない白痴の赤ん坊のような男、つまり「穢い日本」は無力を歎き、悲しみ、怒り狂う訳。そして最後の一ページにおいてSmartなれども壮大なパラドックスを用いて一挙に△生座標▽（これは私が人生哲学を語る際の常套語などから憶えておいてくれ）の負の極限から正のfactorへ一大転回せしめる構想の下に進めている。例えばエンビツデツサンにおいて事物の翳れる部分を刻明に刻明に描寫することで、次第に輝きを鮮明にし、最後の一筆で全体像をくつきりと浮かびあがらせるといややり方。つまり人間の情念の輝きも、翳を深く感知すればするほど、その輝度を増そうと言うもの。

△内▽なる諸君、何も痛みを感じることのない植物的生にあこがれる時が瞬間的にもあるだろう。誰にもそういう時があるはずだ。自演の後はやり切れなくて、失墜感に耐えきれなくて、一瞬のうちにアンチ・クライマツクスを感じ嗚咽の声を洩らしそうになる。そうだ諸君、この檻こそが我々にアンチ・クライマツクスへの冷水を浴びせつけているのだ。元児は我々を閉ざすこの檻にあるのだ。しかしだからと津つて△外▽なる諸君、寝呆けてもらつては困るんだ。かくも身近に鉄格子とコンクリートの壁を全身で感知し、かくも明確に閉ざされて、我々が、△格子なき牢獄▽に暖昧に閉ざされて、いる諸君達より、精神的に不健全なことが一体あるだスうか。諸君達は自演の後は涙をこぼすくらいの失墜を味わ

つてしかるべきではないか。へ内なる諸君嘆け／わめけ／呻
け／もつともつと絶望の淵の底を見極めよ／、けれども最後の
局面で弱者の美学を拒否せよ。自らを讃々たる太陽の下の叛逆
者へと転生せしめよ／要は、樺美智子が言うように「最後に笑
うものが最もよく笑うもの」だ。

P.S 野中君はしぶしぶと今回も不起訴らしい。ほつとした。
80君も出たらしいし救対の人達の熱意によつてAXその他のビ
ラ入つてゐる。見覚えのあるカットもあり、日付けと照合しな
がらやはり加納君が一等頑張つているようです。ここに深く敬
意を表します。私の方もへ外へ出れば、直ちに我が戦線での
活動を開始すべく満をきたしてゐる。獄内における東大におけ
る全国学園職場における。プロレタリア統一戦線派の快進撃を
切実に祈つてやまない。

最後にマイヤングコムレゾド達に一度くるように言つてくれな
いか。奴ら全然連絡しないのだから。「便りがないのは健在な
る証拠」といふいさか陳腐なことわざを信じてはいるが。そ
れではみなさんさようなら

七月九日 三億円のためいき

多佳井 輝(仮名)

男一匹・花のデコツバチより

前略 寝言を一筆啓上致し候。朝日ジャーナル・渡辺裕氏の論
文を読みました。『国民の良識』に訴えるにまことに適切なる

文章であसうと思われます。すこし気になることがありますので
一寸、書いておきます。(至少なようですが) ここでも五・二七・
二八は斗つてきました。「三つの拘置所」だけでなく「四つ」と
すべきであつたと思うのですが……他の独房戦線で斗つてある
諸君に対して、誤解を生じぬ様、当、競馬場近くの戦線でも果敢
に斗つてることを報告しておきます。ほくなんか、「どほじで
——これでいいのだ」てなことをいいながら、缶づめ横目でに
らんでた。僕等のことを書いてくれなかつたから、というのでは
ありませんが、もう一ヶ所、ヒツカカルところがあるんです。

「統一公判要求のための出廷拒否は、やがて質をかえて裁判その
ものを拒否する出廷拒否へと変貌していくであスう。」ここんと
こなんです。「裁判そのものを拒否する出廷拒否」ということの
内実は何なのでしょうか。たしかに、その言葉のひびきは悪くは
ありません。ですが、裁判そのものの拒否」と出廷拒否とは、果
して同一地平上にあるのか、又、筆式で結び得るものなのか。ブル
ジヨア法秩序の否定、解体はまさしく究極的に我々のめざす所
であります。しかし、それを、一般的に語り、安易な形で公判斗
争の中に持ちこめないことは勿論です。「統一公判勝利の為に」
(パンフ)によると「①東大斗争は大学内支配秩序を解体する闘
いですが、これを国家レベルでも支配秩序II法秩序を解体する闘
いとして裁判の中で、ブルジヨア法のギマン性を暴露し、否定し
ていくこと……」(P9・上段)とあります。勿論、この理念には全くの『異議ナシ』です。だが当然に学園秩序IIブルジヨア秩
序の最も弱い環、法秩序II最も強力な暴力的環という差異から生

じる種々の制約を受けねばなりません。最も強力な環に於いて獄中出廷拒否に「裁判そのものの拒否」の質を附与できるのでしようか。どうもこの辯がよくわからないのです。我々は、あくまで統一公判を要求するものです。「支配秩序・日法秩序を解体する闘いとして、裁判の中でブルジョア法のギマン性を暴露し、否定」する可能性を含む場としての統一公判を追求します。

そこからやはり管轄されるであろう「大口的ブルジョア階級裁判」の犯罪性を余すところなく暴露し、情宣し、階級意識の形成への一武器として行くでしょう。でも、いまここで「裁判そのものの拒否」が語られるとしたら、やはり最大限綱領主義の匂いが漂つてくるような気がします。ところで、新左翼（革命的左翼と云うも自由）は一概に「自称共産主義者の自分が、この舞台の上で、どういう踊りをおどつたのか」という点へと問題（階級斗争）を歪少化しがちであるといわれます。（その典型が革マルといえます。）我々は、断じてそうであつてはならないでしよう。『何が最もよく敵にダメージを与えるか』を執拗ように追求してやみません。少々カツコは悪くとも……。『理路整然』とはしていないでしようが、ハゲタカらしく敵の傷口をひつかき回すことが『生きがい』みたいなものです。野良犬兵士は敵の弱みに喰らいついたが最後ちよつとやそつとのことでは離しはしない。いかに不格好でサマにならずとも、それが本当の狼兵といふものでしよう。

さて、聞くところによると早大に於ても、なんかんづくれが一政に於ても、パリ・ストへと突入しているとのこと。（早大一政

と聞くと、『あおかい？』と問うだスうが、そうではないぞ。問われて名のるならば、インボ粉碎強盗非貧困会とそのアンボンタンふんせえ狂頭壊疑の仲間の一員であると答えておこう。）

何はともあれウレシイかぎり。機動隊つき入試で入学。目の前で二百何人の学生が血を流して引つたてられていく。明け方まで続いた「学生大会」で「一般学生」と称する民青、右翼連合との怒号で、「スト解除」決議が出されてしまつたこと、それから足かけ四年。どこでどうなつたのか、今はとにかく当地の極限文化住宅の恩恵に浴しながら、ネツコも吸れず、酒（きす）もひかず、朝から晩まで、マルクスだ。その間、早稲田はと云えば、かの『革民共存の戒厳令下』にあり、まともな斗いは何ひとつ組めなかつたようだ。ああ、君知るや、我が喜びをノヤつと斗争の炎が燃えはじめたのだ。ほんとに、長い沈黙だつた。俺はもう毎日、明日のためにとばかり、ストレートの伸びを良くするのにけん命になつてゐる。喜びすぎて、おかしくなつたのかどうか、面会に來た友人が、『あいつどうとう頭が開いたようだ』と云つてゐるという。をあに、まだまだ三分咲き、ていつのヒラキさ。更に、全面开花（？）へ向けてばく進するよ。これでcoffeeでもあれ、文句のないところさ。『P・S』寝台白布之ヲ父母ニ受ク。敢エテ起床スルハ不孝ノ始メナリ。お互、早いところ、このスタイルで行きたいもんですな。ほんじや、又ね。

七月五日

長井 美智夫

昼夜をわかつて救援活動に心から感謝と敬意を表します。

僕の第一回公判は六月二七日で無事（？）出廷拒否を貫徹しました。さすがにこの日は朝起きた時から緊張したが、メシも全部食べてすぐストリップになつて待つていると、看守がどやどやと入つてきて戦斗開始となつた。看守は下着をぬらしてないか調べたり、ひつぱつしていくかつこをしたり、今だ最愛の彼女にもみせたことのない僕の裸体を写真にとりやがつた。確か写真をとる時は相手の承認がいることはブルジョア法でも認められていたと思つたから、「象徴権のあるのを知らないのか！」

といつたら、写真機をもつた看守は「フン！」とだけいつて出ていきやがつた。あの看守は革命後は即刻処刑だ／とにかくここにいると殺してやりたい奴が一杯でてくる。まず善良な学生である僕をパクッた奴だ（残念ながら名前を知らない。先の六・一五で小田実が公安・機動隊の写真をとそうと提案したのに全面的賛成だ）次に調べ室で大きな声で僕を恫喝しようとしたところ、「安田講堂が一日で落ちなかつたのはトロツキストと自民党が関係があるからだ」などとオンザロツクを飲みながらほざいた「前衛」の親分宮本顯治だ。その次はサディスト連盟会長の加藤一郎とかいう男だ（この男は今恥ずかしげもなしに東大の学長をやつているそうだ）加藤の次は御

知高名なる丸山貞男大先生であります。この御方は十年前は民主主義を守れと、うなつていたそうだが、今年からはファシストに転向したようだ。とにかく殺してやりたいのだ！裁判官席に着席し、「退廷！退廷！」と叫んでいる裁判官殿！貴方もきをつけた方がいいですよ？

半年てのは実に短いですね。そのうちすぐに一年になるでしょう。実質的には即ち実刑の判決がくだつてゐるようなもんだ。シャイロツクはこの上どれだけうわすみしようとしているのか。一年か、二年か、一〇年か。外で斗つてゐる同志諸君。東拘をバスチ！ユにせよ！雑居で「学生ガンバレ」といつてくれる諸君も助けてやつてくれ。十一月佐藤訪米を実力で阻止して佐藤を東拘に連行してこい。十一月決戦はそれこそどえらい斗争にしなければなりませんね。四・二八のたたかいを数十倍する斗いこそ必要であり、そのためにはダイナマイトでもニトログリセリンでも使えばいい。

武裝蜂起主義者などといつて相手をやりこめた気持になつて自分は機動隊のいないところでオナニーにあけつてゐる×××派（あえていわないので奥ゆかしい）などほつとけ。あんな奴らは自家発電させときやいいのだ。自らの下半身でドロドロと燃えた引きつてゐるバトスを体内にくまなく環流させよ！そして武装せよ！武装せよ！武装せよ！自分の妻君をなぐつた奴が堂々と首相の地位にあり、人々と羽田から米国へ飛びたつてゆくなんて、日本のプロレタリアートにとつて屈辱ではないか。特に女性の同志達よ。佐藤は女性の敵だ。あいつを婦女暴行罪で人民裁判にかけよ。妻に暴行を働くなどはもつてのほかだ。決して赦してはならない。

とにかく佐藤を人民裁判にかけるためにも訪米を阻止せよ。女性諸君は決死隊をつくり、断固男性諸君の先頭に起て／そもそも革命運動において「女性だから……」「男性だから……」と分業を決定するのはおかしいのだ。要するに我々の精神が凶器であり、我々の肉体が武器なのだから。もうじき権力は我々が何ももたずにお茶店でコーヒーを飲んでいても凶器準備集合罪で逮捕するかも知れませんぞ。冗談ではないのですぞ。

梅雨てのはイヤですね。本当にジメジメしていくこの前買つけばかりのパンにカビがはえて全部すてねばならないという異常事態が発生した。誠に現在は「異常を正常となし、正常を異常にする」時代だと感心したもんだ。雨も暑い日が続く時はいいもんですけど、こう毎日じやうんざりしてしまいます。特に我々拘留人は雨で運動がない時はがつかりします。日光にあたらないもんだから、僕の肉体も以前より白っぽくなつてしましました。地下活動を続いている山本全共斗議長も眞白な顔をして、五・一九、六・一五に現われたそうですが、彼氏は僕らよりよっぽどしんどいと思います。若干カリスマ的存在になつたようだけど、断固頑張つてください。現在の東大斗争のこうたやく状態は、×××派の言うような後退極面で自己の組織温存主義を誇るというようなではなくて、階級関係自体をあらわすものであり、又×××派が力をたくわえる全共斗の主体的危機を示すものではないでしょうか。「内なる帝国主義の打倒」がますます問われていると思います。とにかく東大全共斗にとつても十一月に向けての思想的・組織的武装を獲得するため進撃

せんことを階級関係が要請しています。

都議選も近づきここ東拘にも宣伝カーからの声が聞こえてきました。三度杉並から北小路敏氏が立候補することを知り、心から支援するものです。被防法を適用された革共同の同盟員が堂々とブルジョア議会にまで登場することを恐れた既成政党は早々イヤグラセをやつてゐるそうですが、革共同というより六七年一〇・八羽田以降の成果を一切民衆の糧とせんがため是非とも当選することを祈っています。

最後に、金嬉老同志は今も拘留されているのですか。ライフルとダイナマイトでもつて日本の権力総体を相手にした彼の斗いに、僕はあの時胸ふるわせたものでした。朝鮮人問題はいつも僕に重くのしかかつていたからです。我々の父や母やあるいはもつと年上の人達が、朝鮮人を虐殺し、現在も六〇万の人が何らかの差別をされて生きていることに對して僕らは確實に何かをおわなければならぬと思うのです。金同志の斗いは日本人を告発したのであり、決して権力のみを告発したのではなかつたのです。我々一人一人がこの告発を正面から受けとめて答える必要があるので民族問題は革命的にもなれば極めて容易に反革命的にもなる。それ程、民族問題は大衆の心を容易にとらえるのでしよう。金同志の行為に激怒した人もたくさんいるださう。しかし何らかの痛みを覚えた人も多いことでしょう。現在国会で強行採決されようとしている「出入国管理法案」は全く犯罪的であり決して赦してはならない法案だ。「他民族を抑圧する民族は自由でありえない」既成左翼が又も沈黙している時、革命的左翼は全力量をかけて斗

わねばならないと思ひます。メチャクチャな法案ですからね。

ここ一週間連日韓国では「朴三選阻止・改憲反対」斗争が学生高校生によつて斗われていますね。かつて李承晩を打倒したどとく韓国の学生運動が力強く胎動していることは、朝鮮危機をより一層深化させてゆくことでしょう。「自主独立」の名のもと腐敗墜落した日共スターリニストの民族共産主義を暴露し、プロレタリア國際主義の旗を死守せよ。「ドイツ帝國主義を憎め。しかしどイツプロレタリアートを憎むな」と書つたレーニンの立場をしつかりと踏みかため進撃せよ。朝鮮プロレタリアートと連帶しニンニクを食べて「自國政府敗北!! 国際帝国主義打倒」のため頑張ろうでないか。

ところで諸君諸兄。内戦の時ボルシエビキは死刑を廃止したといふ（レーニンのみが賛成）が、どうして死刑したらマズイのだスうか。日々労働者の精神と肉体を死にいたらしめるブルジョアジーを救すほどプロレタリアは寛大でなければならないのだスうからサガレーの「パリ・コミューン」（現代思潮社刊）によるとパリコミューン防衛のための反革命軍との戦斗においても死刑は禁止されたらしい。反革命軍は即刻射殺しているにもかかわらず、トロツキーの「ロシア革命史」なんか読んでも反革命側につくであろう人物を即刻逮捕し監禁せずに自由に行動させているが（冬宮にこもつていた将校などは逮捕）、その系列とでもいう民衆とブルジョアジーとの関係をつくつてゐる

のだから、反革命の指導者となりそうな人物は即刻処刑した方が適當であると僕は思うのだが、同志諸兄はどう考えます。革命とは人間と人間との限りなき憎悪がぶつかりあうのであり、現実に僕らは日共・民青に対しても血みどろの斗いをとおして勝利することによつてしか、斗いは一步も進まないのだから。機動隊に対してもそうだ。日大あるいは岡大で機動隊が殺された時、僕はやつぱりシヨツクだつたし悲しかつた。確かに「一切の責任は國家権力にある」といつてますとともにできる。政治とは誠に冷酷なのだから。しかしやはり悲しむべきことだ。しかしやはり、やらねばなるまい／やらねば僕らがやられるのだから。ブル新なんかでは今だに僕らのことを暴力学生といつてゐるようだ（ここ東拘で読む読売は正直でいい）。素直に暴力学生と使つてる）が、民衆一人一人の中にも殺してやりたいと思つてゐる奴が何人かはいるだスう。唯民衆は現実にできないだけだ。彼らの殺してやりたい奴とは具体的には上司・高利貸・政治家・時には肉親・友人と様々いるだスう。彼らの多くは自ら他人を殺すといふ夢想を夢想として終つてしまふ。そして夢想はヤクザ映画に解消されてしまうのではないだスうか。ヤクザ映画の今日の繁栄は民衆の中にひそむ夢をあらわしていくと僕は思うのだが、少し飛躍しすぎるかな。僕も中学・高校の頃は近くの映画館でよくみたもんだ。ドスで刺された肉体からドボドボとほとばしりする真赤な血はそれだけで僕を興奮させてくれたが、いつも主役もスジも変わらないので飽きてしまつた。高倉健や鶴田浩二は民衆の夢をときみよくかなえてくれるので

あるからこそ、彼らは現代の英雄なのだ。この民衆が抱いていいる不満・うつせき感・怒り・いらだちを解き放つことができるものは現状を変革することである：あらゆる民衆の即目的意識を

も安保粉碎・日帝打倒へ！

どうもトンチンカンなことを書いたが、別に発狂したわけではありません。東拘にきた時は半年もいたら発狂すると予想してましたかが、まだその兆候はないようです。昨日またもや勾留更新の知らせがきました。遠慮したのですが、そんなこといわずにまあどうぞ、といわれたのでおひき受けしました。

シュプリコール

分離公判 欠席裁判粉碎

赤色テロ團を即時組織せよ

一切の日和見主義者を打倒せよ！

六月三十日東拘にて

上条邦彦

△自己否定▽から△人民に奉仕する（精神）▽△

東大斗争は、帝大解体！帝国主義的教育支配疾解体！とい
う個別権力斗争という本質的性格をもつていたと同時に、斗う主

体一」とりわけ日本社会でもつとも特權的地位にある東大生に「被害者」であると同時にやそれ以上に「加害者」であることを認識させそして斗いの連帶を求める中で「自己否定」という思想斗争を大衆的に実践させた。——

僕は三年前、小学校の教師を将来の進むべき道と決めて一つの教育系大学を受験して運よく合格した。僕にとつて大学生活は憧れるほどのものではなかつた。早く卒業して教壇に立ちたかつた。ちょうど僕の入学時には、「教育職員免許法」改悪反対斗争がおこつていた。僕はデモに積極的に参加した。それが「デモ・シカ先生をなくす」という理由で戦前の師範学校の復活を意図するものと確信しなからだ。こうして僕の斗争への参加が始まつた。ある時、先輩が尋ねた。「君は将来いい教師になるんだといふけれど、いつたいいい教師とはどんな教育をするべきだと思うかい。」僕は、いつも思つていたことを話した。「子供達のそれぞれの素質を発見してそれをより良く育てあげる……」「文学・芸術の世界の素晴しさを教えてあげる……」「人間性を……」「能力を……」先輩が最後に言つた。「結局いい労働者をつくるということだよ。」「いろいろ素晴らしいことを語つてくれたけれど、結局、これから卒業する子供達に、いい労働者として「立派」に搾取されてきてくれといふ教育しかできないんだよ。この資本制公教育体制では。」このことが僕自身の「自己否定」といえるものの契機となつた。この先輩の言葉だけで「自己否定」らしきものに至つたというのは弁証法に反する。それ以前のクラス討論、集会、デモ、学習などの

それなりの著績があつた後、ひとつの総括としてこの先輩の言葉があつたのだ。

それからは、勿論、大学卒業などということは僕にとって必要なことではなかつた。すばらしい社会革命家になることが目標になつた。『ドカタ』にさえなることが将来の夢になつた。

「若者たち」的雰囲気を強烈に憧れた。クロード・モルガンの「人間のしるし」は、僕の斗争参加への情熱の源となつた。ほとんどすべてのデモに参加した。清水谷公園、日比谷公園、横須賀へ立川へそこには多くの仲間がいた。夕やけ空にはえる多くの旗、シュビレヒコール、スクラム、学連の歌、インターは、見知らぬ過去の60年安保斗争を肌に感じさせ、非常に感激させた。しかし、その頃の僕にとって「革命」は遠い将来のことであつて「革命家」は現実化されるものではなかつた。僕の意識は、多くの学友に戦後教育養成制度改悪の歴史を語りベトナム反戦斗争に参加を呼びかけスクラムを大きくしていくことだと心得ていたにすぎなかつた。これらの斗いは、「平和と民主主義を守れ」というワクを出でていなかつた。そして僕の意識もまたそつた。

一九六七年十月八日 僕達は、前夜の熱烈な熱っぽい雰囲気そして勝利の確信から喜びのうちに、厳粛さにつつまれた集会をもつた。すべての同志達は、これから始まらんとしている日本階級斗争の新たな幕が切つて落されようとしている歴史的瞬間を感じ、生き生きとしている一方で緊張していた。僕達すべてはその日、ヘルメットと棍棒で武装し、ふいをついて羽田空港に

に通じる高速道路につき進んでいた。機動隊は五十人もいなかつた。機動隊はあつとい間で数千の学友によつて粉碎され逃げ出した、数人の機動隊が道路にうつぶせに倒れていた。それから僕達は、応援にかけつけてきた機動隊と迫撃戦を展開した。僕が力いつぱい振り上げた棍棒は、二、三回機動隊員の肩にあたつてすぐ折れた。それから僕達約二十人ぐらいは、警棒の嵐にあい、高速道路の柵に約十㍍下へ転落させようとするかのように強く押しつけられた。「落ちたら死ぬ！」

一九六七年十一月十二日 僕は機動隊に特攻隊のみに突つこんだ三本の丸太のうち一本の先頭にいた。丸太を持つはじめになつてからもしばらくの間意氣があがらなかつたが、途中で両側の多くの仲間達が拍手で僕達の勇気をたたえたとき、僕は「自分で斗うこと」を決意した。

一九六八年一月十八日 東京でのエンタプライズ寄港阻止斗争日比谷斗争で機動隊と迫撃戦、ジユラルミンの桶によつて棍棒はいづべんに折れた。この時、そこにいたのは三〜四人しかいなかつた。後をふりかえつたら多くの人達はだいぶ後にいた。非常に心ぼそかつた。始めて逮捕された。

一九六八年三月八日 王子斗争 僕達は、この日昼から夜にかけて戦斗的にしかも大衆的に斗つた。あまりにも大衆的デモが実現したので僕達武装部隊は先頭にいたにもかかわらず迫撃戦もないまま（その空間さえなかつた）そのまま機動隊と激突、例によつて数人がかりで激しいテロ。ふたたび逮捕される。（以上の個々の斗争は、このような数行のエピソードで語りつ

くされないのは当然すぎるのことだ。労働者・学生の個々人の豊かな豊かな熾しい多くの斗争体験によつて始めて豊富化されるものだ。

しかし、僕にとつては記念すべき斗争だつた。」

以後自己批判的に総括しなければならない空白期が続く。

一九六九年一月一八日 東大工学部列品館屋上にて

僕達はすべて催涙液でぶぬれだつた。とても寒かつた。機動隊の水平狙い打ちが激しい。一人の同志が僕の目前でやられ、あお向けに倒れた。顔面につばいに鮮血がふき出している。彼は意識もうろうとした中で鼻血が出たにすぎないと思つてゐる様だつたが、眉毛の上から鼻にかけて大きなけ目がボツカリあつていた。重傷だ。だが、彼はしつかりしてゐた。階段を伝わつて炎がゴウゴウとものすごい音をたてながら屋上に吹き上げていた。向い側の建物から東大の教官が、機動隊と一緒になつて「君達の生命が危ない。屋上は燃えやすいものでできてゐる。すぐ抵抗をやめなさい。」と何度も絶叫している。

確かに屋上でたき火をすると自然に一面に広がるといふことを知つてゐた。僕は激しい炎を見ながらベトナム南部解放戦線戦士のサイゴン米大使館でのそれこそ英雄的な斗い、そして勇氣ある死をはつきりと思い浮べた。「僕達も死ぬかもしれない。」これまで多くの斗争の中で考え、そして相変わらず莫然としていた「死」の実体感がふつと空から降つてきたように僕の身体を占領した。後で他の同志にきいたら彼もその時一瞬そう思つたと言つてゐた。(これ以上詳しく述べ、今、書けない)

それから一いやそれ以前からかもしれない一獄中で何度も武装

斗争での死をつづつと夢をみた。それらの内容は、過去の斗争体験のさまざまを断片によつて構成されていた。そしてすべて

の夢は、とんでもない所で斗争とは全々縁もないような人が登場してたりしただス。しかし、その夢を見ている時、僕は確かにその場面にあつて生きている実体であつた。そしていつも身体は固くマヒして額には油汗が吹き出しているのだつた。

十・八斗争以降「死」ということが、潜在意識的に僕の頭に生まれた。そしてそれは親しい友人達に語る「僕はドカタになる必要があればきっとそれにそれほど抵抗くなれるだろう」という意識がある。しかし、まだ斗争の必要があつても死に向かつて進むことが出来るだスうという意識は、どうしてもおこつてこない。」という言葉に表われている。しかし、夢での武装斗争は僕をいつも死の局面に立たす。

僕は、自分はいつでも日和ることができる状況にいるし、また意識もまたそうだといふ考えが今でもある。しかし、僕は断固これを拒否しつづけている。これは僕の階級的地位！ブチ・ブルーによつて主要にもたらされる思想だ。僕はいつも思う。

「早く日和ることのできない、日和ることが激痛になる思想・感情を身につけたい。」それは激しい斗争の中しか得ることができないのだ。それは武装斗争での死という問題を避けて通ることができない。しかし、僕達は、すでにこのことについては解答を与えられている。人類の歴史の発展の源動力は人民であります。そして歴史の歴史の歴史をおしとどめようとするすべての反動派に対する斗いで先進的な人民の多くの貴重な鮮血が流されたこ

とによつて今日の歴史が築きあげられたことを知つてゐる。

ロシア革命で、中国革命で、ベトナム革命で……そこには数知れない勇氣ある一人ひとりの戦士の鮮血が流されたことを知つてゐる。

この日本においても数多くの人々が、反動派によつて殺されていつた。（関東大震災、終戦直後の朝鮮人への大量殺戮は勿論のこと）樺美智子同志、山崎博昭同志……彼らの死によつて僕達の今日の革命的斗いの高揚がもたらされたことを知つてゐる。「奮闘すれば犠牲が出るし、人が死ぬこともつねにおこる。だが、人民の利益、大多数の人民の苦しみに思いをいたすならば、人民のために死ぬことは死に場所をえたといふことができる。ただ、われわれは不必要的犠牲をできるだけすくなくすべきである。」

「人はいはずれ死ぬものだが」死の意義にはちがいがある。中國にむかし司馬遷という文学者がいて「人はもとより一死あれども、あるいは鴻毛より軽し」といつた。人民の利益のために死ぬのは、泰山より重い。マシューのために力をつくし、人民を搾取し、人民を抑圧するもののために死ぬのは、鴻毛よりも軽い。」（一九四四年「人民に奉仕する」毛沢東）

広州コムミューン（一九二七年十二月一日～三日）の一つの教訓

中国人、朝鮮人の共産主義者を中心に四〇〇名の士官候補生、武装労働者による蜂起が決行された。しかし、この蜂起が三万人の人民大衆集会でソヴェト委員をソヴェト政府に選んで斗わ

れながら指導の誤り（中國の客觀情勢としても疑問が残る）から数日後にソヴェトに積極的に参加した労働者を中心に七千名が反動派によつて殺された。しかし、指導部隊はその前にコムミュームの盛りあがりが全々期待できないと知ると、学生は大衆斗争にも武装斗争にも参加しなかつた（）広州をその反革命の嵐の前に脱出したのだ。そしてその指導者の一人は、数多くの輝しい過去の斗争実績るもつてゐるといふことでその後ある重要都市の党の高い地位についた。僕は、この人自身の伝記を読んでいるうちに確い不信感と怒りがこみあがってきた。この指導者は、その後朝鮮人バルチザンを組織してその斗争の中心となつて活動してその後どうなつたかわからないといふことだが……：

このような例は過去の歴史においていくらでも見られることがある。僕達すべてにとつて、これから更に成長して人民大衆の立派な革命的指導者（）共産主義者になるといふ試練が課されている。しかし、人民に奉仕するという精神を忘れるならばきっと大きな誤りを犯すことになるだろう。

「われわれの責務は、人民にたいして責任をおうことである。一言一句、一つ一つの行動、一つ一つの政策がすべて人民の利益にかなつていなければならぬし、もし誤りがあれば、かならずあらためなければならない。これが人民にたいして責任をおうことである。」

70年代階級斗争の主軸—安保粉碎—沖縄解放を戦略とする日本帝国主義同盟粉碎の斗いは、激しい反革命の密集した暴虐に直

面するなどと、いふことにつけてきようこの頃何度も語られてゐる。しかし、ただ予測を語ることをもつて今日の僕達の水準をそのまま延長することによつて対処できるといふような幻想を与えてを免罪符にすることは犯罪的結果をひきおこすのではないか。労働者人民は、大衆的に公然と武器をもつて登場している。この地平は後退させることはできない。さらに前進させなければならない。「この集会でもつとも重大なことが忘れてはいる。それは参加者が一人も銃をもつていないことだ。」これは二年前のロシア革命五十周年記念集会で、僕に大きなショックを与えたことはだ。しかし、ただ「銃」をもつただけではだめだ。反動派も「銃」をもつてゐる。人民に奉仕するあふれんばかりの情熱をもつてゐる人々だけが「銃」をもつべきだ。それが革命派労働者人民大衆の武装部隊と反革命反動派のそれとの絶対に消しさることのできない境界線だ。そして、その時、労働者階級を主軸とした広範な人民大衆を結集した生き生きとした歴史の歓車を前進させる、一七〇年代階級斗争の主軸一日米帝国主義同盟粉碎斗争を勝利に導く強大な團結が生まれるだろう。そしてその團結は中国人民、ペトナム人民……に續く僕達日本労働者階級人民の解放の道を切り開くだろう。

中国プロレタリア文学「紅岩」などで描かれてゐる多くの立派な中國共産党員の献身的な「人民に奉仕する死」は、僕にとつてまだ何かかけ離れた偶像としか感じられない。それは、僕が、斗争経験が少ないこと、まだまだ古い時代の思想ーブルジョア自由主義個人主義の害毒に身体中侵されているからだろう。僕達は、労働者人民大衆とともにしつかり武装し人民戦争を実現させブルジョア権力打倒斗争に進撃すると同時に毎日「革命」

をして自己の学生インテリ特有の弱々しい思想感情を改造する斗いにも進撃を開始しようではないか。東大斗争によつて、「自己否定」斗争が大衆的に確認され、革命派と秩序Ⅱ反革命派に分裂させた地平をさらに拡大すると同時にこれから70年代の厳しい階級斗争に向かつて僕達革命派は人民に奉仕するあふれんばかりの情熱をも確認する思想斗争を現実化させなくてはならないだろう。その時は、必ず立派な日本人民解放軍の誕生の時でもある。僕達は少しでも立派な革命戦士となつて釈放される日まで獄中で毎日「革命」斗争を眞面目にやつしていくつもりでいます。

「獄中書簡」発刊委員会のみなさんへ

へ第六・七合併号▽で「なぜ投稿がないのか。我々の仕事は獄中の人々にとつてゼロなのか、マイナスなのか」を読んだ時はちよつと驚きました。なぜつて、獄中に四百人以上もいるのにそんなバカなことあるかいと。考えてみれば僕もその一人でした。すぐ出したかつたのですが二回目の懲罰中でどうにもなりませんでした。「獄中書簡」集は、僕達に他の同志が心の底ではどんな悩み、考えをもつてゐるか生々と知らせててくれます。そしてもう一つの楽しみは「編集後記」で、本当にその人のことばそのままが活字になつていて、ほつとする時があります。僕はみなさんの顔は全々知らないのですが、きつと外であることを確信しています。

被 告 団 通 信 (2)

これを書き出そうとしている今、七、二三東大全学総決起集会が文一一番大教室で行なわれ（雨のため解放講堂前を変更）その熱気がマイクを通して銀杏並木一帯を圧しています。

全共斗の拠点として無期スト、研究棟自主管理を貫徹していれる文学部の斗いに對して、教授会岩崎執行部が行なつてきたのは、授業再開の強行であり、そのためには機動隊を常駐させ、その別動隊としての民青をも巻き込んで、我々を構内から排除するという露骨な策動でした。我々は、他学部での授業再開粉碎が、結局は尻すぼみに終らざるをえなく、したがつて加藤近代化路線による「正常化」を容易にしたことを総括し、全学共斗会議の力で長期にわたつて授業を粉砂し尽す位置づけと体制を確立することが緊急に要請されました。我々は、大学当局の退去命令を実力によつてホゴする、文研究棟泊まり込みをする民青の策謀を断乎として粉碎したことと報告することができます。授業再開こそが、処分や機動隊導入にまざる当局の陰にけんかつ本質的な斗争圧殺であることが全学的に明らかにされ、しかも夏休みの直前にこの策動が出されてきたことは、全共斗の斗いが日常的に無気味な中身をもつて斗い続けられ、その力が全都全共斗の斗争に結集し、更に全国全共斗への巨大な結集

をかちとりつつあることへの、敵権力の恐怖と地に陥つた事の明しであり、そのような弾圧としてあることが多くの学友によつて確認されている。これが現在十日間にわたつて斗い抜かれている文授業粉碎斗争の実態であり、今后最後まで粉碎し尽すであろう保証となつたといえよう。今日の集会は文授業粉碎、大学治安立法粉碎、加藤近代化路線粉碎のスローガンの下に多くの学友の結集によつて開かれている。

次に十九日に行なわれた「被 告」團結成大会が、圧倒的多数の学友の注視のもとに開かれたことを報告します。当日は、文授業粉碎斗争の六日目であり、民青と対峙していた事情から、全共斗の学友の結集が悪かつたのはやむをえないことでしたが、それにも拘らず、他大学全共斗の学友や、弁護団、救対、地域救援会、家族団などの結集によつて「被 告」團の結成が、斗う人民の前面に雄々しく登場し、激励と連帯とを獲ち取つたことを明らかにしたいと思います。大会は、一月一八・一九斗争を斗つた各党派の代表の獄中アピールにはじまり、「被 告」團團長今井 澄君の斗争宣言で最高潮に達し、スローガンを全員の拍手で採択した後、「東大斗争、一九六九年」の映画を上映することで幕を閉じました。詳しくは「被 告」團ニュース・第二号」とともにお送りする結成大会報告を読んで下さい。

翌二十日の弾圧粉碎全都統一集会には、一万を越える学生・労働者・市民が結集し、大学立法粉碎、破防法・騒乱罪粉碎、出入国管理条例案粉碎等のスローガンと共に、統一公判獲得分割裁判粉碎がメインスローガンとして掲げられ、被 告 团 代表が力

強い決意表明をして、その後、地裁をゆるがすようなデモが行なわれました。

今日の北海道地区の家族団会には、被告団から一名代表を派遣し、家族団に獄中生活や被告団の方針を報告し、意見を交換することになつています。同じく今日は結成後初の事務局会議が開かれ、今后の取組みを具体的に開始することになります。獄中の諸君からの意見を自立社あてにどしどしおよせ下さい。

七月二十二日

東大斗争統一被告団

全共斗総力をあげて文学部授業

再開策動を粉碎す！

昨年六月二十七日以来、現在に至るまで無期限ストライキ体制を堅持し、東大全共斗の最大の斗争拠点となつてゐる文学部に対して、文学部当局はストライキ中にもかかわらず授業を行しようという露骨な斗争圧殺策動に乗り出してきた。

岩崎、林という極右反動教授を中心とする授業再開実行委員会の手によつて七月十四日から三週間、専断的に強行されようとした授業再開は、われわれ全共斗の強固な隊列によつて完膚なきまでに粉碎された。当局は授業再開の前日（十三日）には機動隊を導入してわれわれを法文二号館の斗争拠点から排除し、再開初日の十四日には機動隊と民青ゲバルト部隊の二重の庇護

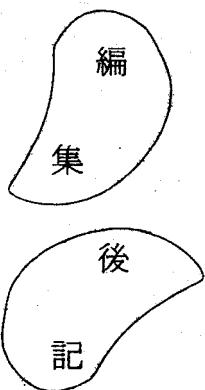
のもとに、形ばかりの体裁をととのえ、新聞記者、テレビ記者を呼び入れて写真を撮らせ、ともかくも正常化の流れをつくりだそうとした。しかし、それ以後の十日間に大学構内ではまったく授業ができなかつたことからも明らかのように、文当局の収拾策動は完全に失敗し、これを政治的に利用しようとした日共・民青は文学部の大衆から完全に浮き上つてしまつた。

また文学部執行部のあまりに強権的な態度は文教授会内部に動搖と混乱をひきおこし、現在、半数近くの教官が授業拒否を宣明するに至つている。

こうした授業再開粉碎行動の完全な勝利を軸として、全共斗の内部では、ふたたびあらたな戦列の構築にむけての動きが急速に展開され、法文二号館の斗争拠点において斗争体制、泊り込み体制が強化されるとともに、文学部の強圧的な授業再開に象徴されるような加藤自主改革路線の犯罪性が徐々に全学的に確認され、工学部の無期限ストライキをはじめとするいくつかの拠点での封鎖、自主管理斗争の火の手があがつてゐる。

われわれは、この授業粉碎行動の勝利のうえになつて、八月における斗争体制の強化を積極的に推進し、九月から全面的に展開されるであろう加藤自主改革路線と真向から対決しなければならない。

東大全学共闘会議
人文系闘争委員会



編

集

後

記

限られた生の中で

彼は一切を一点へと凝集させ

集中させ、彼の総体を

発現させようとする

限られた時間と空間の中から
一切の日常性から訣別して
彼は出撃する

苦悶にひきつる顔——ほおがピクツ

とけいれんする

一瞬彼は虚空を凝視する

ソレカラ

イマーシュを定着化せんと

駆けだす

アタカモコトバガスベテデアルカノヨウニ

彼は髪をかきむしる

呻吟の果てに転げまわる

ひとつのコトバを追つて走る

そのひとコトが世界を彼のものにさせる

という幻想

加ト、岩崎一日共二民青のアベック、ランデブー路線、すなわち授業再開強行策動は全共斗の手により完膚なきまでに粉碎し尽したことを喜びをもつてここに報告する。
連日連夜の献身的活動により文バリを拠点とした全学斗争への新たな地平が切り拓かれつつある。(報告まで) △影 丸△

第十五号 七月二十五日発行

「獄中書簡」発刊委員会

委員長代行 加藤二郎

発行日

△連絡先▽ 東大追分寮内

電話 八一一二三六八

真崎猛哲

非売品・無断転載禁ず

永い長い継続する現在
繰り返される(抽象的)行為

あるいは

(抽象的)行為の繰り返し

分離裁判粉碎日程表

月 日	時 間	法 廷	グ ループ
2・25			
26	10:00	502	安 田 9
28	10:00	702	安 田 12
29	10:00	701	安 田 8
29	10:00	701	安 田 5
31	10:00	703	安 田 2
31	10:00		安 田 14
31	10:00	505	安 田 20
31	10:30	502	法 研 6